

---

# 真剣でこの世界にやってきた

かもし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣でこの世界にやってきた

### 【Nコード】

N6474Z

### 【作者名】

かもし

### 【あらすじ】

主人公【明】はいじめを受けて中学2年から3年のクリスマスまでひきこもっていたが、とうとう明は親にも追い出され自分の行き場を失う・・・そして明はとうとう飛び降り自殺を決意した・・・のはずなただけど

なぜか自分が目を覚めたときには【真剣で私に恋しなさい】とまったくおんなじ世界にきていた・・・そこで彼は一人の男性にあった・・・その名は雅、そして雅をこういう「今日から俺はお前の父さんだ、よろしくな」

そう・・・すべてはここからだっ

初めて投稿するんで

よくわからない文章や誤字、脱字があると思いますが・・・  
よろしく願いします！！

**真剣で考えなさい！！（前書き）**

自分は初めて小説投稿しますのでこれからオナシヤス！！  
真剣で私に恋しなさい！！の派生小説です。

一応更新はまあまあだと思っけていてください。  
それではよろしく願ひします！！

真剣で考えなさい！！

僕の名前は「後藤 明」

僕【真剣で私に恋しなさい】というアニメを見ながら部屋の中1人こもっていた

「はぁ・・・俺もこの世界にいきたくないなぁ・・・2次元いいなぁ・・・」

僕はそう思いながら日々のひきこもりになっていった原因はいじめ・

・

僕はデブで女子からも男子からも嫌われているそのおかげで中2から中3の今までひきこもっているのだ。

そして僕のこの現実逃避生活にも終止符が打たれるときがやってくるその日はクリスマスだった、僕はいつものようにPCをつけゲームしたり掲示板みたりしていた

・・・

誰かが俺の部屋の近くまでやってきた俺はどうせトイレだろうと思つてPCをしていたら親父が入つて来た

「おい、お前は今日でさよならだ、今日の6時に施設にいれるからな」

そう・・・とうとうこの日がやってきたのだ・・・

僕はもうこれでこの世からはおしまいなんだなと思つた・・・

僕は気が付いたら家から出て走っていた親父の声がだんだん遠くなくなつて行く・・・

僕はなぜか学校にきていた、そう僕はここで人生を終わらせようとおもつた

ああ・・・もし死んだら「真剣で私に恋しなさいの世界にいきたくないなぁ・・・」

僕はそう思いながら飛び降りた・・・顔にはいろんなものがでてい



雅「お前の今の精神力と力のなさど体系と顔をよく見てみる」

俺「ぐっ……（絶望）」

俺は……2次元でもひきこもりになるのかな……いや、ならない！！絶対だ！！

これは神が与えたチャンスだ！！絶対ものにしてやる！！絶対にな！！

俺「僕は負けませんよ、神が与えた最高のチャンスもたらすわけにはいかないでしょう」

雅「そうか、まあ困ったときは俺になんでも相談しろー応俺は明の父親だからな」

俺「雅さんあなたはなにものなんですか……！？」

雅「その説明はあとだ……そうだ！！お前は川神院にするか？それとも島津寮どっちがいい？」

俺「うーむ……川神院はいろいろと死にそうだから俺は島津寮でいいや」

雅「まったくお前は……ハーレムなんて期待しても無駄だぞ？」

俺「俺はあんな武道だらけの生活は嫌だ！！しかもあそこ温泉あるだろ」

雅「まあ、いいだろう」

俺「雅さんはどうするんだい？」

雅「俺も少しはそこにいてやれるが俺は四天王だ、いろいろと忙しいから毎日はお前の面倒みてやれんと思う、それでもいいな？」

俺「ああ、もちろんだ……って四天王？なにそれ？」

雅「だああああああああああああああ！！今のは聞かないことにしてくれ」

俺「あ……ああ……わかった」

こうして俺の新しい生活が始まるのだった

**真剣で課題をクリアしなさい(前書き)**

雅がくりだした課題とは・・・



## 真剣で課題をクリアしなさい

雅「ほら、ここが島津寮だ、まあ連絡はいれておいてやったから後はお前に頼んだぞ」

俺「ちよつとまって雅さんまだ聞きたいことはやまほどあるのにイイ！！」

雅「俺は9時には戻るからそれまでゆっくりしといてくれや」

俺「わ、わかった・・・」

いや、いくら二次元とはいえども・・・やっぱ1年半ひきこもってたせいかとても人と会話するのは怖い・・・

おばちゃん「あんが、明君ね今日は寒いから早くいらっしやい！！」

あ、あれは麗子さんか・・・やっぱアニメで見たのとそっくりだなあ・・・

俺「あ、はい（挙動不審）」

麗子「さ、あなたは1回の一番奥の部屋だから」

俺「わかりました」

麗子「それと1階は男子の部屋2階は女子の部屋と分けられているからそこも気おつけてねもし、男子が2階にあげれば・・・その時は・・・まあ、お風呂は1階にあるから」

俺「わかりました、今後ともよろしくお願いします」

そっいつて俺は頭を下げた

麗子「うん、偉い子だね今日はサービスに夜ご飯は卵焼き付けとくわ」

俺「ありがとうございます」

麗子「それじゃあ私は晩御飯の支度でもいってくるね、なにかまたわからないことがあれば行ってちょーだい」

俺「はい、そのときはお世話になります」

なんとか麗子さんとの挨拶も終えて自分の部屋に戻って行ったところだったにしても島津寮ってこんなに騒がしかったんだな

俺「さーつてと、ここが新しい部屋かー ん？なんだこれ」  
そこに【明へのプレゼントだ 雅】  
と書かれた封筒とともにでかい箱があった封筒の中には手紙がはい  
っていたよんでみると

メリークリスマススー！！

君にはとっておきのクリスマススプレゼントを用意したよ  
といつても私生活類だけどね  
携帯と洋服と生活用品を置いといたよ  
まあ、今日はゆっくり休んでくれたまへ

雅より

そう手紙には書いてあったのだ

俺「携帯だどー！！」

どんだけ優しいんだ雅さんは！！

俺「スマホか？アイホンか？ジョ○スか？uuか？KJJJIか？」

中身を見ると I p o n だった

俺「ジョ○スきたー！！！！！！機種はなんだ？」

KJJJI

俺「KJJJIきたー！！！！uuキタ ！！！！」

俺のテンションはまたしても爆発してしまった

麗子「みんなーごはんだよー」

そついつて俺はアイポンを後にご飯にした

俺が食卓についたら

源さんと京と大和とキャップがいた、うむやっぱアニメと一緒にだな  
麗子「今日からこの寮に住む明君、皆仲良くしなさいよ」

俺「皆よろしく!!」

そういつて俺は元気よく挨拶した

キャップ「おう、俺は風間翔一、キャップと呼んでくれよろしくな  
!」

大和「俺は直江大和だよろしく」

源さん「俺は源 忠勝だよろしく」

京「・・・」

大和「こいつは京、ちょっと根暗だが根はいいやつなんだ」

うむ・・・やっぱアニメと同じだな俺はそう思いながら飯にした

キャップ「明はどこからきたんだ?」

この時なんていえばいいんだろうか・・・異次元転送とかいったら  
完璧変人扱いされるし・・・

そうだ地元をいおう!

俺「俺は福岡からきたよ、ちょっと親の都合でこっちにくるはめに  
なったんだがな」

キャップ「その親は?」

俺「ん?知らね」

俺は適当に嘘をつきながらいろんなことを皆と話していた

よかった・・・なんとか俺は会話くらいはできるみたいだ

しかしこの体系どうにかしないとなあ・・・太りすぎて1カ月もた  
たないうちに女子から嫌われてしまう・・・そういえば雅さんは四  
天王とかいっていたな、しかもあの人なんか強そうだし、今日頼ん  
でみるか

俺は風呂からあがったときには雅さんがいた

雅「よお、仲良くやってるじゃねーか」

俺「はい、おかげさまで 所で話があるんですが、いいですか?」

雅「ん?なんだ?」

俺「俺は明日から何年何組になるんですか？」

雅「お前は1-F組だ、学力は心配するなお前よりも頭の悪いやつはいるから」

俺「ええええ!!いきなり高校生ですか!!」

雅「そうだよ、どうせあと少して卒業だからよかつただろ」

俺「わかりました、それじゃ最後に一ついいですか？」

そして俺は雅さんの前で土下座した

俺「雅さん!!俺を強くしてください!あなたは四天王なんですよ

?聞き逃せといつても俺は絶対にそれだけは聞き逃せません」

雅さんは困ったような顔をしたがこう言った

雅「じゃあお前が川神百代に勝つたら俺の弟子にしてやろう」

俺「わかりました!!」

は？」

・  
そうそして俺はいきなりクライマックスな展開へ進んでいった・

真剣で川神百代を倒しなさい（前編）（前書き）

風間ファミリーとも仲良くなった明だが、雅の一言ででかい壁に突き当たる・・・さて・・・どうなるんでしょうね・・・

真剣で川神百代を倒しなさい(前編)

僕はまだ布団の中今日は人生で一番の憂鬱だった・・・  
もしかしたら死ぬかもしれない・・・最低でも半殺し・・・吐血・・・  
・顔がぐちゃぐちゃ・・・  
ば、ばかそんな変な妄想はやめろ！！もしそうなりそうなら参りま  
したすれば・・・  
いやだめだ！！逃げちゃだめだ

逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げ  
ちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃ  
だめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめ  
だ逃げちゃだめだ

あれ？なんかこういうのってほかのアニメで・・・まあいいか  
とりあえず俺は起きることにした今は6:00かぁ俺なりにずい  
ぶん早起きしたなぁ〜なんか静かだな・・・多分皆寝てるだろう・・・  
・いいや、ちよつと散歩しにいこ

俺はさっさと着替えて島津寮からでて散歩することにした

俺「う〜ん空気おいしいなあ〜」

そう思いながら僕は知らない景色を見ながら楽しんでいた  
そうしているうちに俺が雅さんと初めて出会った河原に来ていたこ  
こは本当にいい場所だ俺のお気に入りポイントに追加しよ  
???「ゆーおーまいしん、ゆーおーまいしん」

俺「ん？こんな朝からランニングかぁ〜すげえ〜なって・・・も  
しや」

そこには赤いポニーテールの女の子がタイヤを引きずりながら走っ

ていた

そう川神一子だった・・・

俺「う、うん当たり前だよな俺は今この世界にいるんだからあれ、  
なんでかな？なんか景色がぼんやりしてきた目から汗なんてよくないぞ俺・・・やばい、体からは汗はでてないのに目から汗が・・・」  
俺はとづくにこの世界に来たことを実感してうれしさのあまり感動してしまっただ・・・

一子「君？なんで泣いてるの？大丈夫？」

俺「！？」 いや、そのなんとというかちよつと思ひ出し感動を・・・  
あははは

そうこうしてる間に一子は俺の所に近寄って話かけてきたようだ、  
俺の挙動不審っぷりまじっペーわ

一子「私は川神一子！君の名前は？」

俺「俺の名前は後藤明」

一子「明君っていうんだ、初めて見る顔だけど、転校生？」

俺「う、うんそうだよちよつと親の都合でね」

一子「そうなんだ、よろしく」

そして川神一子は俺に握手を求めてきた

俺「よろしく」

川神一子の手はとても柔らかかった・・・にしても本当に京といい、  
一子といいすんごく可愛かった・・・二次元先輩まじばねえっす・・・  
本当に一目ぼれしそうになった・・・

俺「んじゃあ俺はそろそろ時間だから」

一子「うん」

そういつて俺挨拶を終えて島津寮に戻ることにした  
戻ったときには朝ごはんもできていてそこに雅もいて皆と雑談していたようだ

雅「お前どこいったんだよ、ほら、早く飯食うぞ」

風間ファミリー「おお〜お前どこ行ってたんだよ」

本当に俺は幸せ者だよ、一日一日が本当に楽しく思える

俺「あ、うんちよつと河原まで散歩しに」

麗子「ほら、今日は記念に朝からトンカツだよ」

キヤップ「うっしやああああ」

俺「（朝からトンカツとはこれまたいかに・・・）」

朝飯も食い終わって部屋に戻どつてしたくなどをしていたら雅さんが部屋に入ってきた

雅「よお〜、今日から学校頑張れよ」

俺「はい、ありがとうございます」

雅「あ、あとな川神百代に勝てる必勝方を教えてやるうか？」

俺「!？」

雅「え〜つとまずな・・・」

風間ファミリー「おい明〜はやくしろ〜」

俺「今いく〜」

そして俺が玄関を開けたら身長が高いムキムキな人がいた、そうガクトだった・・・

おかしいな？また目に汗が・・・出させるか!!

ガクト「お前が明だな？俺様は超モテモテイケメンのガクトだ恋愛に困ったら俺様に相談してくれたまえ」

ガクトはドヤ顔で言ってくれた

俺「ああ、よろしく」

大和「さて、皆集まった事だし、いきますか」

俺は皆と雑談しながら河原までいくと週刊少年ジャソプをもったヲ

タクっぽい人が・・・いや

師岡卓也モロが来ていた・・・

モロ「ん？新入生？」





百代「ちよつとこいつから決闘を申し込まれてな、今日はいい日になりそうだ」

俺「……。」

一子も「!?!」みたいな反応したが、まあ今日俺に出会ってこの展開だからな……

ああ……本当にやっちゃまったよ……雅さん鬼畜だわあ……

真剣で川神百代を倒しなさい（後編）（前書き）

なんかキャラと違った話方しているようで申し訳ないです  
意味が分からない文章があっあら申し訳ないです

ついに川神百代と対戦ですね、生きて帰ってこれるのかな？

真剣で川神百代を倒しなさい（後編）

小島先生「今日のHRはこれで終わり気負つけて帰るんだぞ」

はぁ・・・とうとうやってきたのか・・・俺は緊張の汗が止まらなかった・・・  
息も荒くなっていて、心拍数も上がっていた。

キャップ「どうした明？冬なのに汗かいて息も荒くなって」

大和「まあ、仕方ねーよなあ姉さんと戦うんだもんな」

俺「い、いや、べ、べつに、そ、そんなことはないぞ？」

大和「今のうちにキャンセルしてきたら？まあ、できそうにもないけど」

俺「俺から受けたんだ、今逃げるわけにはいかない、それに俺もただ単にあの人と決闘を申し込んだわけでもない」

キャップ「いろいろ大変そうだなーお前」

ガクト「おーいモモ先輩きてるぞー」

俺「来たか・・・」

百代「おーい明ー早くー」

俺は黙って闘技場みたいな所までいった・・・

怖い、本当に怖い、逃げだしたい・・・でも、逃げたらどうなるかぐらいわかるまた三次元にいたときの俺と同じだ俺は強くなりたいたって雅さんに伝えたんだ！！だからこのチャンスのがすわけにはいかない！！  
絶対な！！

side百代



百代「!?!」

俺は思いつきり川神百代を一本背負いで投げていた

俺は正直驚いた・・・まぐれなのか? いや、雅さんがアドバイスをくれたにしても・・・!?!?

だとすると雅さんはすごい・・・こんな計算までして・・・

俺「うおりや〜」

俺は投げたあととっさにパンチを繰り出したが・・・

~~~~~

雅「お前はパンチはするな蹴りでいけ、ただでさえ力がないのに蹴りは力が無くても威力はある」

~~~~~

しまった!!

そのパンチは完全に止められていた

百代「よく私を投げたもんだな、だがお前のパンチはへなちょこだ」  
俺「なつ・・・」

あの体制から俺は思いつきりはじかれてしまった

かなりとんだだろうな・・・

地面はやつぱかてえわ

俺「いったあ・・・」

そういえば全員がざわめいてるような

あの川神百代を投げたんだそりゃ驚くはずだ俺でもびっくりだ

百代「さて遊びはこれまでだ」

俺「え・・・」

と思った瞬間腹部に尋常じゃないほどの痛みが襲ってきた

俺「・・・ッ」

やばい息できない!!俺死んじゃう!!過呼吸になりそう!!

痛みと混乱がまじりあっていた・・・そしてだんだん意識が遠のい

ていく・・・

やっぱばけもんだわあの人・・・いや、ここで負けたら・・・強く  
なれないかもしれん・・・

学園長がなにか声をあげて言おうとしているまずい！！  
とっさに声をかけた

俺「まだ全然大丈夫です」

思いつきり声を出したはずなのに声はかかれていた

俺はなんとか息できないまま立ち上がることはできた

もう肩で呼吸をするというのはこういう事なのかと思いましたよ

俺「さあ、続けようか」

百代「気に入つたぞ、その精神」

百代はまたかなりのスピードでとびかかってきたしかし1度はあの  
スピード見たんだ

俺はでたために思いつきり蹴っていた・・・なんかすごいスピード  
で蹴った気がする・・・

百代「なっ!？」

俺は百代先輩の腹部にけりがあたっていた・・・今日は本当にラッ  
キーだ

しかしダメージさほど聞いてないようで俺は思いつきり顔を殴ら  
れた・・・そこからは意識がない・・・

side百代

なんなんだあいつ・・・少し油断しすぎたか？

にしてもあの気で2分持つとは・・・この先が楽しみだ

この後俺は黙って保健室を抜け出しあの河原へいったら雅さんがいた

雅「いやあ〜お前の負けっぷりは見事だった」

俺「だいたい無理だよ!!あんな化け物・・・」

雅「お前がまさか俺のでたための助言で投げるなんてなしかも蹴り

も一発いれたんだろ？」

俺「え？でたらめ？またまたーそんな嘘を」

雅「いや、本当だお前は確実に強くなれる・・・いいだろう！！今日から俺は明の師匠だ！」

俺「本当ですか！！」

雅「ああ、本当だでも今日は少し休め明日から俺も鬼になるからな、いいな？」

俺「はい！！ありがとうございま・・・」

雅「おいおい泣くなよ、泣くのは百代倒してからだろ？」

明日・・・どうなるんだろっなあ・・・



真剣で青春しなさい(前)(前書き)

皆さん本当にゴメンナサイ!!京のキャラ崩壊注意です!!京が好きな人は読まないほうがいいのかもかもしれません!  
読み返したら意味不明な所続出・・・本当に申し訳ありません  
進展なしといった所です



いやあの人は四天王に間違いない!!あの人なら絶対そうしてくれ  
そうだ

麗子さんから飯呼ばれたので俺は行くことにした

大和「まさか姉さんに1発くらわすとわなあ」

キヤップ「本当だよ!何者だよ明は」

俺「いやあ〜マグレマグレ・・・にしてもあの人本当に化け物です  
な腹部に一発食らったときは死ぬかと思ったよ・・・」

大和「まあ・・・姉さんだからね、しょうがないよ」

俺「んじゃあ俺はちよつと筋トレでもしてくるわ」

大和「姉さんのパンチ2発食らったが、大丈夫なのか？」

俺「ああ、この通りだいz・・・いつてえええええええ!!顔面腫  
れてるじゃん!!」

大和「今頃かよ!!」

じゃっかん腹部も痛いな・・・ジンジンくる・・・

そつえばえん関付近にダンベルが・・・

俺「あ、これが」

そこには普通のダンベルがあつた

俺「これだなよし・・・つて重たっ!!」

多分10?くらいのダンベルだと思うだろう

これを100回か・・・力入れるだけで腹部に激痛走るのに・・・

俺「1・・・2・・・はあ・・・7・・・9・・・10!!」

があー死ぬー死ぬーこれは本当に辛いぞ!!

俺「あと9セットかあー」

30回すぎたあたりから結構汗がでていた・・・運動不足だなあ俺も  
俺「50!!はあ・・・はあ・・・ま・・・じ・・・きつい・・・」

50回すぎたころには汗まみれになっていた

俺「80回だこのやるおおおおおおお!!」

そう叫んで真正面向いたら川上一子と川神百代がたっていた

俺「あ、どうも」

な・・・なんているんだ？

百代「よお、もう元気なのか」

俺「力入れると腹部に激痛はしますけどね」

百代「にしても顔ひどいなーすまん、本気で殴りすぎた」

一子「お姉さまに一発いれるなんてすごいわ」

一子もこちらの会話に入ってきたようだ

俺「偶然ですよ、てかなんで島津寮にいるんです？」

一子「ここ温泉あるでしょ？だから私たちもたまに入りに来ているの」

俺「そうなんですか」

百代「んじゃあまたあとでな。一子いくぞー」

一子「はい」

そういつて川神百代と川神一子は去って行った

俺「さて・・・あと20回だな」

はあ・・・はあ・・・まじ・・・死ぬ・・・

時計を見ると8時を過ぎていたとりあえず風呂に入らねば・・・

俺はさっさと着替えを用意して風呂に入ることにした

にしてもきもちいなあ〜トレーニング後のお風呂は

俺「はあ〜」

なんかお風呂つてすんごい気持ちいよね、なんだか眠くなるし

風呂をあがって俺は自分の部屋に戻っていたそこには昨日と同じように雅さんがゲームをしながら俺の部屋でくつろいでいたてか、な

んでお面してるんだろ？」

つて四天王でもゲームするんだ

雅「よあ、トレーニングお疲れさん」

俺「雅さん！どこがゆっくり休めですか！きつすぎですよ！」

雅「なあ〜にあれくらいで甘ったれんな、明日は5キロ走る予定だから」

俺「なあ！！」

雅「それくら余裕だろ、1年で百代を倒せるくらいになるんだから」

俺「あ、あと技とか教えてくれるんですか？」

雅「お前にはまだ早いからあとでな、んじゃあ俺は新しく始まるド

ラマ見ないといけないんでじゃあな〜」

俺「もう帰っちゃうんですか？」

雅「ああ、明日は河原でまってるから」

俺「わかりました！明日頑張りますから！」

雅「おう、期待してるぞ」

そうして雅さんは俺の部屋をでていった

今日はもう寝よう・・・いろいろと疲れた

ん〜もう朝かあ・・・早めに寝たのに・・・今何時だ？

／／6：30／／

もうこんな時間かよ・・・どんだけ寝てんだ俺は  
とりあえず起きないと

俺は腕に力を入れた瞬間痛みが走った

俺「いたっ！おいもしかしてこれは・・・」

そう筋肉痛だった1年ぶりの

本当にまいったなあ・・・



とびかかってきた

大和「あーあ・・・」

大和が叫んだ瞬間にはも3人いたDQNがぶつとばされていた

1人は意識あるようだが残りの2人はもう意識がない・・・大丈夫なのか？

百代「こんな美少女相手に3人もくるとは・・・許せんな」

そう言つて百代さんは関節を外して行つた・・・いやあくグロい！

つーかこんな人と昨日戦つていたのか・・・

ガクト「おいどうした明いきなりすわちまつて」

俺「ちよつとこんな人と昨日戦つたのかつて想像したら腰抜けちゃつて・・・」

ガクト「あつははははお前もまた決闘申し込んだら次は命ないかもな」

どうやら俺たちの会話が聞こえてたらしく

百代「おーい皆ー」

モロ「またはでにやつたね」

百代「あんな卑怯な奴はこうでもしないと、あれ？ワン子は？」

俺「ワン子？」

いや、まあ知ってるけどね一応知らないふりを

キャップ「ワン子っていうのは一子のあだなんだあいつは頭なでると

犬みたいになるからな」

大和「まあ、笛吹けば」

そうやって大和は笛をぴーっと吹いたとたんに一子が現れた

一子「よんだー！？」

俺「うおっ！！」

いつのまにかあらわれる一子・・・やつぱ川神家はとんでもないな百代「ワン子いかないと学校遅れるぞ」

一子「うん、もうひとはしりしてからいくわ」  
そうして一子はまたタイヤを引きずりながら走って行った・・・すげえな

そういえば京は俺とあつていらいだんまりしてるな・・・俺の事嫌っているのだろうか  
てあれ？京いなくね？と思つていたら京は大和にくつついていた  
あいかわらずだなあ・・・

ガクト「京、おめえ最近元気ないな」

京「ん・・・」

大和「そういえばそうだな明が来てから」

そこふれちゃう？

京「やまとが私と付き合つてくれたら元気になる」

大和「やっぱいつもの京だわ お友達で」

やっぱ俺の事嫌いなのかなあ・・・俺太ってるし・・・生理的に無理とかいう奴かな？

そうこうしている間に俺たちは校舎まできていた

突然京が俺に話かけてきた

京「お前さあ・・・私たちに絡まないでくれる？」

俺「え・・・」



真剣で青春しなさい(後) (前書き)

ちよつとシリアスに書きすぎた・・・orz

真剣で青春しなさい(後)

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ!

京が俺の所通りかかる瞬間『関わるな』と行ってきやがった

な…なをいっているのか わからねーと思うが

俺もなに言われたわからなかった…

頭がどうかなりそうだ…

催眠術とか…超スピードとか

そんなチャチなもんじゃあ断じてねエ

もつと恐ろしい片鱗を味わったぜ…

なにいつてんだ俺?それよりどういうことだ…  
もう意味が分からなかった

俺「京、その話はあとで聞かせてもらおうじゃないかこのままだと  
納得がいかん」

京以外の風間ファミリー「?????」「」「」

どうやら京は俺しか聞こえないようにいったようだ

…許せない!!なんだその卑怯な考え方は京お前そんな奴だつ  
たのかよ

京「んじゃあ、放課後屋上で」

そして俺は風間ファミリーから走って去って行った、悔しいよ俺…

昔の世界でもあんな感じだった・・・今の世界でも結局こうかよ・・・  
そうやって皆からシカトぶっこまれるようになるんだよな

なんなんだよ、いつたい・・・

俺は1人で教室に入り席についた

俺はまたいじめられた時のような絶望を味わった  
でも俺はこれくらいで負けない・・・

大和「おーい明どうしたいきなり変なこといいだして先いってしま  
うとは」

俺「ああ、わりい」

ガクト「京になんかいわれたのか？もしかや告白されたのか？」

俺「なわけねーだろ！！」

ガクト「ジョークだよジョーク！！そんなたたくなって」

そうこうしている間にチャイムが鳴った

???「今日から君たちの担任をするルーネみんなよろしくだよ」

あールー師範代かやっぱそっくりだわ

ルー先生「私は主に体育の先生だからよろしくネ」

この人俺たちが2年では担任もってないような・・・まあいいか

そして俺は福本育郎とスグルと友達になった、もちろん風間ファミ  
リーとはしゃべったけどやっぱり京の言葉がつかかかってあいつら  
と話すのはつらかった

HRも終わり俺は屋上へ向かった

俺「どういふ事だよ、俺のどこが嫌いなんだよ」

京「……。」

あまり小さくて聞き取れにくかったからもう一度聞くようにした

俺「おい、はっきりいえよー!」

そういつたら京がくれたかのように

京「お前は私にとって邪魔なんだよ!お前みたいな奴は嫌いなんだよ!だから二度と私達とつるむな!」

俺「……。」

俺はため息をして……いや涙をこらえて

俺「風間ファミリーの古参がいう事は　はむかえないからな……  
わかった」

京は走って屋上からでていった

side大和

なんだ明の奴?

まあいいや一応俺も気になるし屋上で聞き耳していくか

京「お前は私にとって邪魔なんだよ!お前みたいな奴は嫌いなんだよ!だから二度と私達とつるむな!」

大和……あいつなにいつてんだ!!

明が来てから京の様子がおかしいと思っていたらそういう事だったのか……

京は走ってこちらへ来ていた

大和「京お前……」

京「や……大和……」

俺は無意識に京にビンタをしていた

大和「今日は緊急集会だ」

そうやって俺は風間ファミリーをなんとか呼ぶことができた

キヤップ「なんだよ大和」

大和「全員そろったな、じゃあ今日は明と京について話そう」

ガクト「お、もしかして付き合ったのか？」

大和「ガクト黙れ!!」

俺が真剣で怒っていることにみんな気づいたのだろう

大和「京は明がきてから様子が変だと思わないか？今日だって明なんか俺たちとの接し方おかしかったし。それに朝明がくれたのも不思議だったろ？」

モロ「そういえば、そうだね。京なんかしたの？」

京「……。」

大和「俺は少し気になって屋上に行くことにした」

百代「そしたら京が明に関わるなっていったんだろ、そしてあの時

大和がビンタをはなつたと」

大和「姉さんなぜしているんだ!!」

百代「私もあのときそこにいたからな」

ガクト「おい、京!! てめえーどういっつもりなんだよ!!」

一子「そうよ京、明なにかしたの？」

そうといつめると京は泣いて言ってくれ

京「怖かった……」

キヤップ「え？」

京「明が入ったら今楽しい生活が変わるんじゃないかって……私は嫌だったの風間ファミリーに新しい人を入れることが」

そういうと俺は京を抱きしめていた

京「!？」

大和「明が変な奴に見えると思うか？」

ガクト「あいつちよっと化け物に決闘申し込んだ馬鹿だけど、すごいやつだったぞ」

百代「ガクトく化け物って誰の事だ？」

ガクト「いや・・・化け物じゃなくてびしょ・・・ギヤアアアアアアアアア」

キャップ「あいつすげえ面白そうじゃん」

モロ「そうだよ、僕も明はそんな根に持った奴には見えなかったけどね」

一子「私も明君はとても悪い感じに見えなかったわ、だから京別に変わらないから安心していいわよ」

大和「それでもお前はなにか意見はあるか？」

京「ない・・・」

大和「じゃあお前は謝ってくるんだな。できるか？」

京「うん」

大和「よし、じゃあそろそろ離してくれないか」

京「このままがいい」

大和「おい、お前はまず謝りにいくんだろぅがー」

百代「そうと決まればあいつを探さなくてはな」

大和「それなら多分河原にいるだろぅよ」

こうしてなんとか京とも解決できたし、一件落着だな

side out

雅「お前なに顔ぐしゃぐしゃにしてないてるんだよ、振られたか？」

俺「うう・・・そおんなじじゃあないんですよ・・・」

雅「じゃあなんだ、俺に話してみる」

俺「今日な京から・・・(以下省略)」

雅「あつはははお前も災難だな」

俺「笑わないでくださいよ！！こちら真剣なんですから！！！」

雅「実はそうでもないぞ」

俺「え？」

雅「ちよつと缶コーヒー買ってくるわ」

俺「えちよつとまっってくださいよ」

そういつて雅さんはどこかへ行ってしまった

大和「おーい明ー」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6474z/>

---

真剣でこの世界にやってきた

2011年12月23日06時02分発行